

洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

万国博記念

第十九回洛友会総会

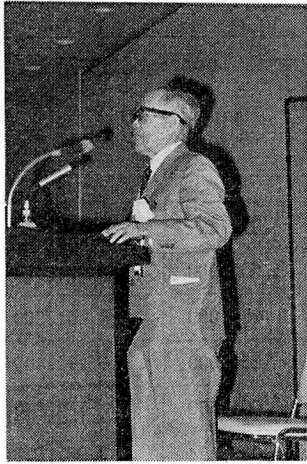
関西支部総会

本年度の総会は、関西支部総会を兼ねて万国博を記念し、六月七日(日)午前十時より新阪急ホテルに於て、出席者二二一名に及ぶ盛会裡に催された。

まず関西支部の総会に始まり、加藤支部長の挨拶のあと最近の活発な支部の事業並びにクラブ活動についての報告があり、更に今後親睦について心強い抱負を述べ

られた。次いで並木幹事より昭和四十四年度事業並びに決算報告と昭和四十五年度の予算案についての説明があり、万場異議なく可決された。

支部総会に引き続き本部総会に移り、大谷幹事の司会の下に、まず鳥養会長より総会の開催に当り関西電力(株) 芦原社長をはじめ関係各位の万国博見学に対するご



鳥養利三郎 会長

厚意あるご援助に対し、また懇親会場と万国博に至る交通について京阪神急行電鉄(株) 森社長のご配慮に対し、洛友会を代表して御礼の言

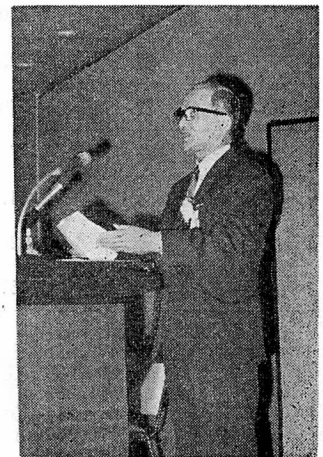


芦原義重 副会長

葉を述べられた。更に今日の総会は出席者数に於ても家族を含め二二一名という大盛況であり、何時も出席者は老人組に多いが、今後は若い世代の時代であるから、若い会員の出席率の多くなるよう配慮されたいとの希望を述べられた。

次いで芦原副会長(万国博協会副会長)は、今回の万国博はその規模内容に於て空前の博覧会でありこの機会に洛友会会員及び家族の多数の出席を得たことを非常に喜ばしく感じるとのご挨拶があり、万場拍手裡に感謝の意を表した。

次に電気教室を代表し林千博教授より最近の学校紛争と教室の現情について報告があり、議事に移った。
第一号議案 役員任期満了、改選についてはすべて重任とすることが、満場異議なく可決された。



加藤 関西支部長

第二号議案 昭和四十四年度収支決算(別項)は山本幹事より報告があり、その監査について幹事和田昌博氏より正確なることの証言があり、これを承認可決した。
第三号議案 昭和四十五年度予算(別項)これも同様山本幹事より説明があり、可決された。

総会終了後直ちに懇親会の昼食に移り、森社長(京阪神急行電鉄)より(株) 新阪急ホテル社長として歓迎の挨拶があり、昼食を取りながら近藤幹事の司会により宮田九州支部長、真田中国支部長、田中卓次中部副支部長、西本東京支部長らがテーブルスピーチとして各支部の近況の披露があり、続いて関西電力(株) 専務の和田昌博氏より万国博の電気設備について、その設備の特異性や苦心談を説明して頂いた。
昼食終了十二時半、直ちに第二

会場の万国博見学に移り、各自見学後自由解散となった。

- 出席者 計二二一名
- 会員 一五六名
- 同伴者 大人 五七名
- 小人 八名



昭和 44 年度

収 支 決 算 書

昭和44年 4月 1日より
昭和45年 3月31日まで

収 入 の 部

科 目	決 算 額	予 算 額
会 費	1,504,900	1,600,000
電気講習所会費	201,300	180,000
預 金 利 子	192,405	200,000
雑 収 入	781,840	580,000
前年度繰越金	3,987,358	3,987,358
合 計	6,667,803	6,547,358

支 出 の 部

科 目	決 算 額	予 算 額
刊 行 物 費	1,702,750	1,470,000
名簿編集費	53,420	15,000
同 印刷費	1,030,000	850,000
同 発送費	254,040	250,000
会報編集費	26,000	5,000
同 印刷費	153,100	150,000
同 発送費	186,190	200,000
諸 費	874,879	1,020,000
備 品 費	18,040	15,000
通 信 費	29,067	40,000
会 合 費	27,732	60,000
総 会 費	150,000	150,000
集 金 費	114,980	150,000
総 掛 費	310,000	355,000
旅 費	225,060	250,000
臨 時 費	70,000	70,000
懇話会補助	70,000	70,000
支 出 合 計	2,647,629	2,560,000
次年度繰越金	4,020,174	3,987,358
合 計	6,667,803	6,547,358

昭和 45 年度

収 支 予 算 書

昭和45年 4月 1日より
昭和46年 3月31日まで

収 入 の 部

科 目	予 算 額	前年度決算額
会 費	1,600,000	1,504,900
電気講習所会費	200,000	201,300
預 金 利 子	200,000	192,405
雑 収 入	1,005,550	781,840
前年度繰越金	4,020,174	3,987,358
合 計	7,025,724	6,667,803

支 出 の 部

科 目	予 算 額	前年度決算額
刊 行 物 費	1,840,000	1,702,750
名簿編集費	40,000	53,420
同 印刷費	1,100,000	1,030,000
同 発送費	260,000	254,040
会報編集費	20,000	26,000
同 印刷費	220,000	153,100
同 発送費	200,000	186,190
諸 費	1,095,550	874,879
備 品 費	25,000	18,040
通 信 費	40,550	29,067
会 合 費	50,000	27,732
総 会 費	200,000	150,000
集 金 費	130,000	114,980
総 掛 費	400,000	310,000
旅 費	250,000	225,060
臨 時 費	70,000	70,000
懇話会補助	70,000	70,000
支 出 合 計	3,005,000	2,647,629
次年度繰越金	4,020,174	4,020,174
合 計	7,025,724	6,667,803

預金および現金 (昭和45年 3月31日現在)

信託預金	3,478,456	三菱信託銀行 住友信託銀行
定期預金	500,000	住友銀行京都支店
普通預金	11,865	住友銀行京都支店 第一銀行百万遍支店
当座預金	241	第一銀行百万遍支店
郵便振替	10,357	京都地方貯金局
現金	19,255	
計	4,020,174	

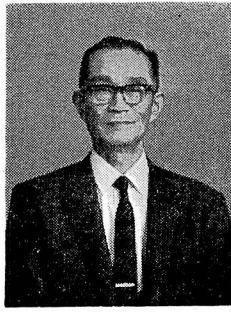
一番長かった日

東京支部
(昭和四年卒)
谷口 正夫

ところは仏領印度支那東京州
トレンキン
広安省長湮村、ときは昭和二十年八月二十日頃、終戦後間もない頃である。

将来の大カーバイド誘導工業を夢に見て、ハイフォンの東北の山の中にカーバイド工場の建設に励んでいたが、終戦と同時にすべてが夢と消えた。

その日は、朝から流言と飛語がさかんに飛んでいた。工場建設に協力していた村の顔役から「今夜は匪賊の一団が工場を襲撃、掠奪にくるといふ噂さかもっぱらである」との注進を受けた。当時、チャン工場の建設に当たっていた日本人は十二、三人であったが、放火や掠奪から工場を守るため、毎晩二人ずつ交代で警備に当たって



いた。その夜は、私の当番であった。私の腰には大きな革のバンドが締められてあり、ピストルと手榴弾が一個ずつ付けてあった。私はそれまでピストルや手榴弾を使った経験はなかったが、工場警備のためにわか仕込みでその使用方法を教わり警備についていたのである。

その夜は真暗だった。十一時もう少し回ったと思う頃、工場を巡回中、突然向こうの方からドドドドという機関銃の音が聞えてくる。同時に十三ミリ曳光弾が工場を目標けて一斉に飛び込んでくる。と

たんに私は工場の正門に向かって走り出していた。そして正門の側まで来た時、私は腰を抜かして地面に坐り込んでしまった。昼間からこのことあるを覚悟して、一そのサンパンを雇い、正門側の運河に待機させてあった。万一の場

合には、部下の日本人十数人はトランクを持ってこのサンパンに乗せ、安全なハイフォン地区へ逃げさせる計画であった。そのサンパ

ンが、いよいよ今になって砂の上に乗り上げているではないか。ここはハイフォンの河口から三十キロの上流にあり、干満の差が大きく、この時はあいにく干潮で、運河の水は一滴もない。満潮の時に入れたサンパンは干潮で動かなくなっているのである。何のために雇われているのか知る由もない船頭夫婦は、いい気持ちになって寝込んでいる。いよいよ今夜は工場の最後を見届けて、俺も安南の土となるか。それにしても一緒に働いてきた同僚十数人の日本人を、終戦の今日、巻き添えにして犠牲にすることは何としても耐えられない……。

八月十五日無条件降伏の報を聞いた時、今後の終戦処理がどうなるか私は迷った。外からの連絡はハタと止まり、情報は何も入らない。ただ一人で考えるだけである。大体、無条件降伏した日本が生きて日本に帰れるものかどうか。現地で一生活力として使役されて戦災の復興に働かされるかも知れない。たとえ生きて日本に帰ったとしても、第一次大戦で敗れたドイツはどうであったか、長年にわたって大きな賠償金を課せられたでないか。生きて日本に帰

り働いた分を全部税金として納め、これを賠償金に当てたとしても、

高は知れたもの。それよりも命をかけてもこの工場を守り抜き、連合国に移交して賠償の足しにしてもらう方がよほど働きがいがある。当時の金で一千万円、今の価値で五十億円の工場を命をかけても守り抜こうと決意していた。

それにしても、部下の日本人は何としても無事に日本に送り返し社長に会わせ、家族に引き渡し度い考えであった。今、最後のドタン場にきて、サンパンは干潮のため砂の上に乗っていて動かす術はない。とにかく合宿に寝ている日本人を全部たたき起こして、各自の室で待機させることにした。幾時間もたった。曳光弾はおさ

ま。その後、九月一日、ハノイにむいてホーチミンがベトナムの独立を宣言し、フランスとの間に九年間の独立戦争を戦うに至ったことは周知の通りである。

街を歩いていて、つくづく思う事はこの複雑なごちゃごちゃした配電設備が、若しなかったら、街中がどんなに美しくなるだろうかと。あやしげな立看板、ポスターもさる事ながら、真黒い電柱、それから出ている種々雑多な引込線、

配電雑感

四国支部
(昭和十年卒)
藤本 悟郎

よくもこれだけのせられると思う位の電線を、四方にはりめぐらしている。キレイなビルに電線を引入れるにも美の調和等は余り考えず、もよりの電柱から沢山の電線をだらりとさして引入れている。また、道路には両側に電柱がずら

(次頁へつづく)

りとたてられ、狭い道を益々狭くし、自動車等の通行を不便にしている。目にみえる範囲で教えあげればきりがない。

今、これらが全部地下にもぐってしまい各家に引入れる電線も家の裏側を利用して、地中から建物に沿って引入れる様にすれば、あの見苦しい電柱、電線類は全々お目にかかれなくなり、緑の並木におおわれた街中はすっきりとしてどこか天国に遊ぶ様な感をうけるに違いない。ついでにハデな立看板やポスターも規制して取締る様にすればもっと美しくなる事だろう。ここで、電柱が地下にもぐってしまったら、一番まごつくのは犬ではなかるうか。巳の勢力範囲を誇示する標識がなくなってしまう、新たな対象物を探し求めねばならない。

ともあれ、これは決して夢ではない。諸外国では早くから配電設備を地中線化し、道路の要所々に配電塔を作り、地中引込みをや



いる。

昭和十年学校を出て満州に渡り大連へ着任した時、当市の繁華街である浪速通り的一般配電を全部地中化し、家庭への引込は裏側より入れ、街の美化に努力していた当時はかけ出しで、まだ何もわからぬ筆者であったが、マンホールにおけるケーブルの接続等問題があり、今後の保守に苦勞があるだろうと言ふ事をきかされた。それから約一年たつて、ハルビンに変わつて行つた。ここは帝政国シヤ時代に東方進出への拠点として巨大な費用を投じ建設した都市であつて、我々の目をみはらしめる美しい立派な建物が多くあつた。中でも配電設備は全部地中に入れられ、一本の電柱もみせる事は出来なかつた。街は美しい楡(ニレ)の樹木におおわれ、至る所に市民のいこいの公園があり、異国に遊ぶ感が誠に深かつた。

ここは厳寒時には地下一・五米以上も凍り、埋設深さもさる事ながら冬期の保守は大変だつたと想像される。然るに、日本人が進出する様になつてから、これが全部架空線に変わつてしまつた。筆者もその一端をになつたが、理由は、ケーブル布敷数かなりの年数がたつており、負荷増も著しく、事故続出し、かつ、増設に困難を伴つ

たものと考えられる。電圧は早くから六・六KVを採用しており、学ぶべき点が多々あつた様に思う結果的には、電気の使用面では大いに改善されたが、都市の美化からは二歩も三歩も退いた事になり、甚だ残念に思う。現在はどうなつてゐることやら。

日本でも最近はこの様な方式を採用し、街の美化に協力している所が各所にみうけられる。

電線物を地中線化する事により自然の猛威雷、風雪等から設備を完全に保護する事が出来(一部は仕方ないが)、事故停電が減少して、お客様からはよろこばれる。

最近のケーブルは絶縁材料のすばらしい発達のお陰で、取扱が容易になり、かつ寿命が長く、価額も安くなつた。また、地中線自体の事故も非常に少くなつたので従来より余程採用し易くなつたようだ。

問題は布設工事である。狭い道路をほりすんで埋設する訳であるから、通行制限、水道、ガス管、下水管、通信線等との交錯とか、色々厄介な事が多い。

最初の設計にあつたつて、管路の数やケーブルの太さをどの位にするかは重要な問題で、その都市の将来性をあらゆる角度から検討し負荷の分布、増加率を考慮し、可

なりの長期間をみこした先行投資の必要があろう。ここで、設備費について検討してみると、架空線新設に比して、同容量の地中線新設の費用は約一四倍位必要である従つて、現在の国力で、主要都市の配電線路地中工事を実施することは容易なわざではなく、将来とも仲々むずかしい事と思う。

然し、好むと好まざるにかかわらず、止むを得ず実施しなくてはならない地区が各所に出て来ており夫々詳細な計画をたて、実施している。

何れにしても、街の美化、配電線事故防止の見地から英断をもつて、積極的に実施してほしいものである。次に電圧の問題にふれるが、高圧側は一応三・三KVから六・六KVに昇圧され、問題の地区は一〇KV、二〇KVになろうとしてゐる。これなら将来の負荷増を考慮してもまづまづ大丈夫である。三・三KVから六・六KVに昇圧する際、保安の点その他について色々論争されたが、事故が特にふえたと思えないし、問題は余りなさそうである。新しいものへ移行する時には、大事をとる事も必要ではあるが、ある程度の勇氣と英断が必要である。

一方、低圧面をみると、国民生活水準の向上に伴い、家庭電化が急速に進み、一家庭に二台のテレビは珍しくなくなつた。ちよつとした家庭は大低大口電灯に変わり、最近の工事統計からみると、単三単二引込みが半々位になつてきてゐる。驚くべき負荷増である。これに對して何時迄も一〇〇Vでよいだろうか。

これを救う最も経済的な方法は配電方式の変更か、昇圧以外には考えられない。前者については既に単三方式がとり入れられ、負荷密度の高い地域では盛んに採用されてきたが、今日ではこれが一般化しようとしてゐる。

昇圧の問題は仲々むずかしく、経済面、安全面、既存設備、国際標準との関連、将来性等色々な角度から検討してかからねばならぬし、需用家設備の補償と言う大仕事が残されてゐる。

諸外国の例をみると、どこも我々よりは高い電圧を採用してゐる一・二〇V級は別としても、二〇〇V級になると保安の面で幾分不安があるが、これらに對しては人命尊重を最優先的に、充分研究し完全な保護装置を取付けて、実施している。

家庭電化が高度に進むと、電圧変動、フリッカー等が問題になり質の向上が強く要求される。今こそ、一〇〇Vより高い電圧、将来を考慮した新しい電圧が生れてきていい時ではなかるうか。

ふくと電気技術者

中国支部
(昭和十五年卒)

古賀 七郎



一昔以上前の話であるが、ニューヨークの国連事務所に行った時

その通訳官に日本の「格言」の通訳が一番難かしいという話を聞いたが、事実、風俗習慣を異にする者の間で「格言」を理解せしめる事は難事中的難事だと思ふ。

例えば「紺屋の白袴」というと昔の日本人ではすぐ解るかもしれないが、今時は日本人でも、紺屋も袴も余り知らないだろうし、まして其が白かろうが黒かろうが大した事でもないし、格言の真意もつかみ難い。ましてや外国人となると尚更である。

この格言をその通訳官は、「靴屋の子供ははだしで歩く」と訳したが、そう言われてみると我々にも何となく解る。

マルクスの言葉に「働かざる者は食うべからず」というのがあるが、これは昔、中国の百条和尚の「一日なさざれば一日食らわず」というのと同意語のように感ずるが、実は、これは大変な違いで前者は他動的な命令であり、後者は自分自身の自覚から生れたものと言われる。

又、欧米に行つて見て、私は日本人程自然の物を良く料理して食べる事を知っている者はないと思ふ。例えば筍であれ蕨であれゆがいて食べる事を知っているが、これも東洋人だけであろう。又、うなぎ、たこ、なまこ、うにと多種多様の物を実に上手に食べる術を知っている事は、祖先に對しいくら感謝しても感謝しきれないものだと思ふ。

時に猛毒を有する河豚を食べる術においてはほとほと感心させられるが、私には電気技術者と河豚には共通の何ものかを感じ愛着を感じてならない。

河豚には猛毒があつて、我等の

祖先は多くの人がその犠牲になつた事だろうし、又今頃も時々新聞種になつてゐる。

しかし国家認定の料理人の手にかかるとこんな美味な魚も少ないと思ふ。殊に危いといわれる肝など、その道の通には欠かせぬものである。

しかし、それは専門家の手にかければこそであつて、素人料理などには一般には手を出すものはない。素人が料理したのではまさに命と引き換えである事を、よく承知しているからである。

電気もまさにこれと同じで、異なるところは河豚はいつまでも河

関西支部

第九回ゴルフ大会

第九回(加藤支部長杯第二回) 関西支部(シュアア)ゴルフ大会が去る五月十日(日)二十二名参加の下に武庫之台ゴルフ場にて行なわれた。

陽光の下、新緑にはえるゴルフコースで一同元氣一杯クラブをふり、懇親を深めつつ快適な一日を過ごした。

尚、成績は

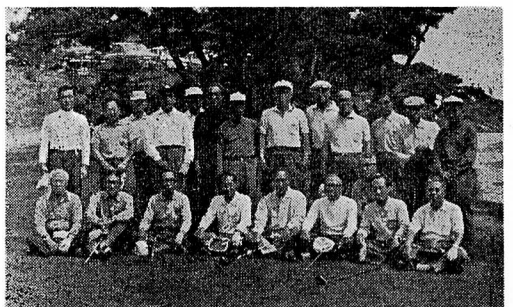
- 優勝 福中 希生
- 二位 加藤 孝一
- 三位 善積 俊一

豚であつて何の変りもないけれど電気は常に進歩している。そして今や人間生活の上で必要不可欠のものとなつた。

これ程生活に密着した電気も、専門の電気技術者が河豚の国家認定の料理人と同様に細心の注意と高度な知識の上に立つて処置しているからこそ、安全で人間にとって有用なのである。

進歩に応じた電気のプロ料理人たる事は、何と忙がしく継続的努力を要することか。

河豚さしの味と共に噛みしめたものである。



参加者は次の通り

- 昭3 上林 明
- 4 鈴木 亮三 山県 敏夫
- 6 伊藤 俊夫 大西 正一
- 岡崎 二郎
- 7 浅田 英直 善積 俊一
- 和田 昌博
- 8 塩見 武夫
- 9 北井 方 喜田村善一
- 吉田 辰雄
- 10 香山日出雄 中沼 保三
- 11 中堀 孝志 神谷 進
- 14 那須 恂一 福中 希生
- 堀 真幸
- 15 小南 光夫
- 16 加藤 孝一

(堀記)

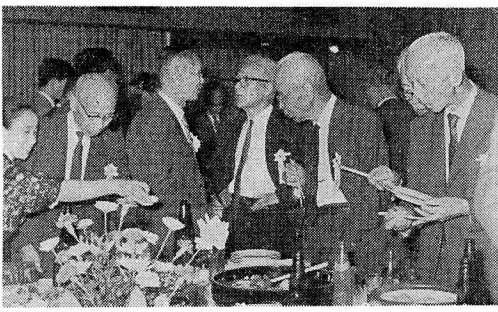
次回は十一月八日(日)の予定

東京支部総会

昭和四十五年東京支部総会は、五月三十日(土)午後五時より目黒の八芳園において開催された。

当日は本部より鳥養会長、山本幹事並びに数室から川端教授を来賓に迎え、七十三名が参集、青木支部長より開会の挨拶に引き続き昭和四十四年度行事及び会計報告があり、総会議事が進められた。

四十四年度の主な行事としては支部総会、幹事会(五回) 講読会(三回) 旅行会(二回)その他趣味の会(囲碁、将棋、麻雀、ゴルフ、謡曲)グループ活動、先輩懐古談の録音、喜寿のお祝等であり四十五年度もほぼ同じ行事を予定



している旨報告された。続いて四十五年度の新役員として左記の各氏の紹介があり、西本・吉岡両氏より就任の挨拶があった。

来賓の鳥養会長より「東京支部が活発に各種の行事を行ない、大変結構なことと思う。これからも大いにやってほしい。」との激励の辞を頂き、また、本部の山本幹事、川端教授よりそれぞれ近況報告があった。

今年卒業の松尾義武君(日本電

九州支部

洛友会九州支部では、折にふれ博多在住の人々で昼食会を開催しております。たまたま、日本電気協会の総会が五月十三日に福岡で開催されたのを機会に、電気ビル十二階のスカイルームで昼食会を計画しました。

当日は、九州支部会員二十二名の他に本部の池上教授、東北の下実氏、東京の巽良知氏、老田他四郎氏、関西の野田順二氏、並木博氏が参加され大人数の昼食会となりました。

宮田九州支部長の挨拶のあと、

気勤務)が新人として紹介され、壇上で挨拶した。

最後に新会員歓迎を兼ねた懇親会が別室で開かれ、席上、山口信助(大十一) 村上竹夫(大十三) 両氏に、吉岡副支部長より喜寿のお祝が贈呈された。引き続き懇談に移り、和気あいあいのうちに午後七時半、懇親会の幕を閉じた。(沢田記)

新役員

- 支部長 西本 憲三(昭六)
- 副支部長 吉岡 俊男(昭七)
- 幹事 山田昭二郎(昭二五)
- 同 沢田新一郎(昭二五)

総会

各地区の方々から各支部の現況、池上教授から教室の現況についてお話がありました。

各支部の活躍ぶりはまことに嬉しく感じ、一方、大学の正常化に教室関係者がいかに苦勞されたかに思いをさせたものでした。

今後とも、教室、洛友会が一体となつて発展することを祈りたいと思います。

一時間あまりの昼食会であったため、皆さん名残り惜しそうに午後の研究発表会に出かけていかれました。

中部支部総会

五月三十一日(日)午前十時半から新装のホテル・キャッスルで開催した。

本部から鳥養会長と山本幹事、母校からは近藤、川端両先生においてを頂いた。また今回は、新し



い企画として故人の未亡人をお招きすることにしたところ、故清水勤二氏、故古田秀穂氏の未亡人がご参加下さった。

当日は五月晴にめぐまれ、金鯱の映ゆる名古屋城の景色を眺めながら、同窓親交の語らいは興を呼び熱をおび実に楽しかった。

尚、而未亡人には一同の寄せ書きを持ち帰って故人の靈に捧げて頂くことにした。

散会后名古屋城内の「さつき大会」などを自由に見学して別れた。(古田記)

そのあと、九州地区の方々別に室に集まっていただき、前年度の会計報告、四十五年度の役員選任を行ない、支部総会もあわせて実施致しました。

出席者

- 昭15 井上 大助
 - 昭21 杉村 英男 増岡 健一
 - 昭22 大塚 成吉 久場 義隆
 - 昭26 大倉富士雄 平川 四郎
 - 昭27 上田 保之
 - 昭32 梶井 信一
 - 昭33 石原 賢司 勝木 将文
 - 昭35 岡 範彦
 - 昭36 池田 一光
 - 昭39 大田 裕資
 - 昭4 小菅佐七郎
 - 昭11 加来誠一郎 西村 利夫
 - 昭8 戸山 信芳
 - 昭10 本郷 式良
 - 昭6 足立 斌
 - 昭3 高柳与四郎
- 以上 二十二名

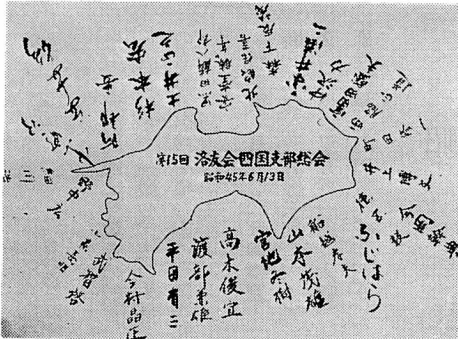
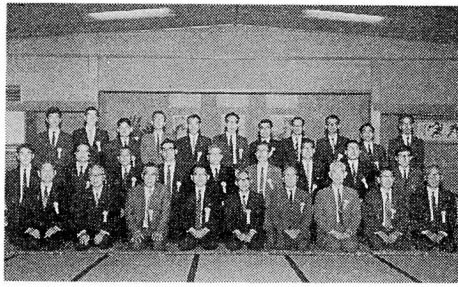
四国支部総会

第十五回四国支部総会は、六月十三日(土)午後六時より高松市内紅羽旅館にて本部から高木先生山本幹事をお迎えして開催した。

梅雨空模様のみし暑い日であったが多数の会員が出席され、特に北脇氏(昭五)黒田氏(昭十一)の両特別会員は四国支部時代を懐しんで本年もはるばる京都・大阪から参加され、出席者数二十七名をかぞえ盛況であった。

今村幹事の司会で官地支部長の挨拶、四十四年度会務報告の後、四十四年度会計報告と四十五年度予算案を満場一致で承認した。

会務報告で官地支部長の黄綬褒



章、渡部氏(大十二)の勲四等受章の栄誉が披露され一同感銘をあらたに四国支部の発展を祝った。

ついで高木先生より教室の近況を興味深く拝聴し、山本幹事から本部の情況報告をうけたまわり、最後に官地支部長退任の後、阿部新支部長を満場一致で選出した。

引き続き懇親会に移り、宴たけなわとなるや酒杯応酬、懐旧談に花が咲き、綺麗どころの踊りに、会員自慢のかくし芸、高木先生のマリオネットの妙技が披露され、和気あいあいの雰囲気を楽しみ、名残りを惜しみながら散会した。

(井上記)

新役員

- 支部長 阿部 要(昭8)
副支部長 片岡 亘(昭8)
幹事 原田尚文(昭14)

中国支部総会

中国支部では本部から鳥養、林(重)、近藤の諸先生ならびに山本幹事をお迎えして、六月十八日午後六時より広島市内の料亭「あまぎ」で昭和四十五年度総会を開催した。

真田支部長の挨拶にはじまり、鳥養先生のお元気な挨拶、近藤先生からは大学紛争を含めた最近の教室の様子をお聴きし、昭和四十四年度会計報告、支部会則の一部改正等、一連の議事終了後、引き続き懇親会に移った。

出席者一同は、諸先生方をかこみ教室をなつかしみながら、和気あいあいのうちに愉快なひとときを過した。

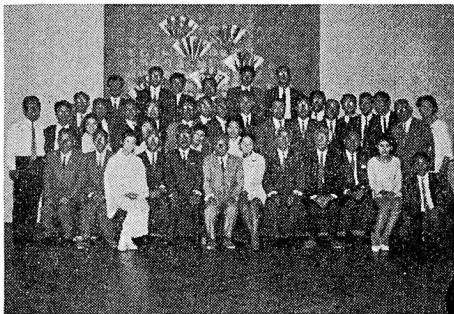
尚、今年度はフレッシュ・マンの新加入および他支部からの転入あわせて二十二名という支部発足以来の大巾な会員増があり、今後の支部の発展が期待される。

出席者

- 鳥養利三郎先生 林 重憲先生
近藤 文治先生 山本 茂雄幹事
昭2 木元 正夫 真田 安夫

- 同 船越孝夫(昭22)
同 今村晶正(昭23)
同 土井正之(昭23)

- 8 潮見 公安
9 重見 通雄
10 天野 宗明
12 佐々木毅一
15 古賀 七郎 角井 勉
16 井上 武 松谷健一郎
17 吉村 定雄
17 松橋 達良
20 大月 清一 川北 良之
22 梶谷 守男
23 門野内忠幸



- 24 伊藤 薫
25 石田 隆弘 浴 厚夫
26 野中 清文 安岡 幸義
27 仁木 可也
28 小刀 一晃
30 奏 祐夫
34 村尾 久
36 井上 靖彦
38 牧 征滋
43 山本 勝弘
44 井上 英也
45 大森 乾司 竹田 三生
講昭 3 徳原 平蔵
10 岡崎 磨
14 高橋 広市
以上 三八名 (牧記)



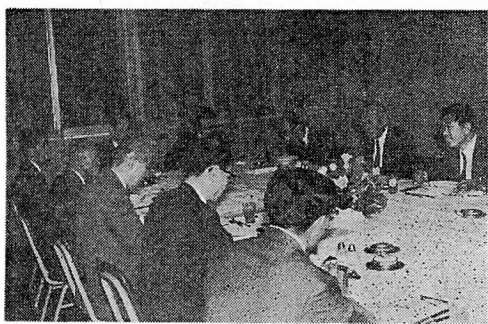
東北支部 総会

第五回東北支部総会は梅雨晴れの六月二十日仙台共済会館で行なわれた。

今回は、本部より板谷先生のご来仙を得、支部会員としては平井

支部長、内田副支部長をはじめ、秋田、福島など遠隔地からの参加も合わせて十四名のご出席を得て盛況裡に議事が進められ、山下氏より九州支部の状況報告、支部役員改選等を決定して総会は滞りなく終了し、次いで板谷先生より「核融合プラズマの現状」と題する講話が行なわれ、未来のエネルギー問題について認識を新たにしました。

引き続き懇親会に入り、板谷先生



生のソ連訪問談より最近の教育、政治談にまで発展し、夜のふけるのも忘れ名残を惜しみつつ散会した。

新役員

- 印は幹事兼
- 顧問 荒井源三郎(大4)
- 支部長 平井寛一郎(大15)
- 副支部長 内田 英成(昭9)

昭 二

会

本年の例会を七月三、日の両日に開く。梅雨季のさ中、おまけに台風二号が近づいているので、幹事はひやひや。それがなんと晴天続きとは……参加者二十名。見学は二社のご厚意によって、原電

敦賀及び関電美浜原子力発電所へ。説明の方から「皆さんはご専門の方々ばかりですので……。」とこそばゆい前置きのことを受けながら、久々で神妙に講議を聞く。已によく知っている人、今度少しわかった人等にまじって、小生はうっすらわかったようなことで、唯々人智、人力の奥深さに感心する。

福井県は原子力発電にその繁栄をかけているので、県内の海岸沿いにもっともって原子力発電所が

- 評議員 中村 喜一(大13)
- 同 進藤 陽吉(昭6)
 - 同 山下 実(昭7)
 - 同 内藤 正義(昭14)
 - 同 〇二村 忠元(昭15)
 - 同 鈴木太左衛門(昭15)
 - 同 〇内山 政亮(昭19)
 - 同 〇入間田 泰(昭19)
 - 同 阿部 鉄郎(昭21)
 - 同 松野 匡雄(昭27)
 - 同 〇武藤 良介(昭28)

出来るとのこと。

参詣した所は、神功皇后を祭る朱塗りの美しい氣比神宮、手足の不自由な人々に靈験のある石観音尊皇攘夷の志士武田耕雲齋等四百余名のお墓。又見物は、ガイド嬢によれば日本三大を四大とするならその一つに入るといふ氣比の松原、三方五湖を一望の内に俯瞰するレンボライン等。何れもそれだけの価値ありと福鉄観光バスの提灯持をしておく。

前記二発電所への途中の海岸は松青く水清く、素朴な海水浴場が所々にあるが、やがで金儲けの輩が乗り込んで来て、何処も同じ喧嘩化してしまうことならん。第一夜はトンネル温泉「北国」で歌一つ出ずじまいのおとなしい

訃音

- 大 10 山田一夫 39・2・2
- 昭 5 伊沢安次 44・8・27
- 昭 7 古賀学一 43・11・19

原田 逸三
木下 邦吉
鶴岡 三郎
林 紀一
太田 有次
路次 安秀
新田 幸三
内田 幸三
神前 藤三郎
唐瀬 一夫
八條 健三
文川 有

宴会。隣室の農協のおばさん達の方がずっとご盛会であった。第二夜は京都タワーホテルで夕食。我々の時代の月謝は年七十五円だった。(今食っている夕食代は二千五百円、その時分なら三円か?)等々々と古い話も出た。万博見物を兼ねている諸兄も数名あり。来年は朝寝、朝酒、朝湯の小原庄助さんの国で又会いましょう。それまで皆さん、元気で、元気で……。

(瀬川記)

編集後記

- 昭 13 加藤 駿 45・1・8
- 講大 5 脇坂弥太郎 43・8・8
- 講大 6 坂上谷亘洪 43・11・2
- 講大 6 藤本守親 42・6・16
- 講大 7 藤原 篤 45・3・27
- 講大 9 山田善吉 44・12
- 講昭 2 小林 勝 43・11

以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

○本号は洛友会総会記事と各支部の総会記事、並びにかねてよりご投稿を頂いて居た東京支部谷口正夫氏、四国支部藤本悟郎氏、中国支部古賀七郎氏のご感想をのせました。御多忙中のご執筆を感謝します。

○次回は十一月頃に発行予定で会員各位(特に若い世代の会員)の危懼なき御意見等をご投稿下さい。各支部の年代別の会合でも記事を出るだけ会報にのせたいので、お送り下さい。

○会報を送っても行先不明で返送されるのが相当数あります。お互いに不便ですから勤務先及び現住所が変ったら必ず事務局にご通知下さる様お願いいたします。

(幹事 山本茂雄)